

「わたしは、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出したあなたの神、主である。」 出エジプト 20 章 2 節

昔、イギリスの近くを航行していた船が、暴風雨にあつて難破した時、船員の一人は、ようやくのことで海岸に泳ぎつき、一人の農夫に助けられました。

～ 戒めを知っているか？ ～

しかし、こんな方法でしばしば敵国のスパイが入ってくるものですから、農夫は警戒して、「君は何者だ」と質問しました。すると、その助けられた男は、「私はクリスチャンだ」と答えたのです。そこで、「ほほう、君はクリスチャンならば神の戒めを知っているか、一体いくつあるかね」と聞きますと、その男は「それは12ある」と言うのです。「それはおかしい、昔からモーセは我々に十の戒めを与えているが、戒めが12あるというのは初めて聞いた。じゃあ、それを言ってみたまえ。」

～ 加えられた戒め ～

助けられた男は、とうとうと、モーセの十戒を述べた後、「しかし、私たちの主イエス様は、その十の戒めに更に加えて、私は、あなた方に新しい戒めを与える、と申されました。」と言いました。

- ・ その1、「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」
- ・ その2、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」 マタイ 22 章 36～40 節

その話を聞いた農夫は、彼が本当のクリスチャンであることを知って、大変喜び、その男の元気が回復するまで親切に面倒を見たということです。

～ プラス、愛 ～

昔、神様はモーセを通して、人々に十の戒めを与えられました。しかし人々はこの厳しい十戒の前に常に有罪でした。律法は罪を自覚させるだけです。律法を行うことによって人は救われません。モーセの十戒はそのままでは不完全でした。

さてイエス様は新しい戒めとしてモーセの十戒に「愛」を付け加えました。神を愛することと、人を愛することです。イエス様は「私があなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」と言われました。この様に、イエス様が愛を加えたことによって、十戒ははじめて完全なものになりました。

「…主を愛せよ。…隣人を…愛せよ。」 マタイ 22 章 36～40 節

———— 規律の必要性 ————

さて日本と違って、イスラエルの民の荒野での生活は、私たちが想像するよりはるかに厳しいものでした。もし少しでも道を間違えば、そこはもう死の世界です。彼らの生活はいつも死と隣り合わせです。

ですから、それだけに荒野の中にあつて生きるためには、はっきりとした規律が必要となって来ます。又、荒野は人間を孤独にします。よって人と人との、愛の交わりも大切なのです。そこで主は、あえてこの様なシナイの荒野の真ん中で、人に戒めを与えられたのでした。

———— 人生という荒野 ————

さて私たちも今、人生という厳しい荒野の中を旅しています。ですから私たちも又はっきりとした規律を必要としているのではないのでしょうか。

ところで十の戒めですが、

- 第1戒から第4戒までは、神様と人とのかかわりについて、書かれています。
- 第5戒から第10戒までは、人と人とのかかわりについて、書かれています。

———— 律法の目的と働き ————

では、律法の目的と、その働きについて考えてみましょう。

ガラテヤ書 3 章 24 節には次のように書かれています。「こうして、律法は私たちをキリストに導く養育係となりました。・・・」

- ・ 第1、 律法は神様の満足する、高い聖い生き方（完全に義なる基準）を人に示し、人に要求します。それは神様の前に、罪ひとつない完全な生き方です。それは、とても人の実力では出来ません。
- ・ 第2、 さて少しでも、律法を理解するようになると、私たち自身が、神様の期待しておられる義の基準に、全く達していないことがわかってきます。この様にして、私たちは自分の罪人としての現実の姿が見えてくるのです。こうして、自分自身が完全な罪人である事を悟ります。そして、このままではいけない、救われたいと願うようになります。

・第3、 律法は、私たちに罪を認めさせ、悔い改めへと導きます。そして悔い改めた結果、私たちは義と認められます。神様と和解します。こうして神様との間に平和の世界が与えられます。義と認められ祝福された私たちは、まことのいのち、永遠のいのちを神様からいただくことが出来るのです。
(ガラテヤ書3：26節)「あなたがたはみな、信仰により、キリスト・イエスにあって神の子どもです。」
神様の子になれるのですね。

——— 律法を全うするには ———

ところで、私たちは神様が私たちに与えて下さった律法を、今どの程度守っているのでしょうか？
律法をどの位、自分に適用しているのでしょうか？

ある方が、自分についての感想を次の様に言われました。「私は、まだまだ未熟な私です。でも私なりにひたむきに、最善を尽くして、律法に正しく生きようと真面目に努力しているつもりなのです。そしてまだ完全に、たとえ律法を実行できていなくても、きっと神様はその努力を認めて赦してくださるのではないのでしょうか？ 私がこれだけ努力をしているのですから・・・」

さて、どうでしょう。この考え方は、きわめて甘く、人間的だと思います。皆様はどう思いますか？
律法は完全に、全部を守らなければ神様は満足なさらないと思います。

ヤコブ書2:10、11節には、次の様に書かれています。「律法全体を守っても、一つの点で過ちを犯すなら、その人はすべてについて責任を問われるからです。『姦淫してはならない』と言われた方は『殺してはならない』とも言われました。ですから、姦淫しなくても人殺しをすれば、あなたは律法の違反者になっているのです。」

このみことばからもわかる様に、シナイ山で与えられた十の律法は、一つの律法の十の面（十の顔を持っている）と言っても良いのではないのでしょうか。ですから、律法は全部を、すべて、完全に守らなければなりませんね。でも、私たち人間に、正直に言って、そんなこと出来るのでしょうか？ 結論から言って、出来ないと思います。

——— たった一つの大切なこと ———

では、一つの律法とは、一体何のことなのでしょう？ またその律法の目指す所、その目的とするところ、とは・・・。

イエス様はマタイ22:35～40節で、次の様に言っておられます。
「・・・律法の専門家がイエスを試そうとして尋ねた。『先生、律法の中でどの戒めが一番重要ですか。』イエスは彼に言われた。『あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。』これが、重要な第一の戒めです。『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい』という第二の戒めも、それと同じように重要です。この二つの戒めに律法と預言者の全体がかかっているのです。」

イエス様は、ここで一つのことを教え、語っておられます。それは「神を愛しなさい。人を愛しなさい。」ということです。実は「愛する」ということが、すべての問題を解決することなのですね。私たちのなすこと、それは愛がすべての動機にならなければならない、ということです。神と人とを心から愛し、神と隣人とのために生きているのならば、律法は私たちのうちに、すでに全うされています。

繰り返しますが、私たちは律法の前に、自らを義とすることはとても出来ません。聖い神様の前に出る資格はありません。私はただ一人の罪人に過ぎません。しかし、そんな罪人の私をイエス様は無条件で愛して下さいました。(ローマ5:8)「しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれたことによって、神は私たちに対するご自分の愛を明らかにしておられます。」

私は自分を義とするための何の力も持っていませんが、そんな私を無条件で主は招き、受け入れて下さいました。主は私を愛して下さいました。

——— 愛がないなら ———

パウロも次のように言っています。(第一コリント13章2、3節、14章1節)

「たとえ私が預言の賜物を持ち、あらゆる奥義とあらゆる知識に通じていても、たとえ山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、愛がないなら、私は無に等しいのです。たとえ私が持っている物のすべてを分け与えても、たとえ私の体を引き渡しても誇ることになっても、愛がなければ、何の役にも立ちません。・・・愛を追い求めなさい。」

私たちも、今の荒野の様な人生の中で、しっかりと互いが愛し合い、神様のことばに聞き従い合いながら、共に進んでまいりましょう。

「あなたの神、主を愛しなさい。・・・あなたの隣人を・・・愛しなさい。・・・この二つの戒めに律法と預言者の全体がかかっているのです。」 愛によって生きている時、実はすでにすべての律法は守られています。

最後に、一人の少年の話をしましょう。

その少年は一切れパンを買って家に帰る途中でした。ある人が、少年に聞きました。

「何をもっているの。」

「パンです。」

「どこで手に入れたの。」

「パン屋さんから。」

「パン屋さんはどこから手に入れたの。」

「自分で作ったんです。」

「なんで作ったの。」

「粉で。」

「どこから粉を手に入れたの。」

「粉屋さんから。」

「粉屋さんはどこから手に入れたの。」

「お百姓さんから。」

「じゃあ、お百姓さんはどこから手に入れたの。」

そのとき、少年の心に真理がわかり始めました。彼は答えました。

「神様からです。」

「では君はだれからパンを手に入れたの。」

「ああそうだ、神様からです。」

こうして、最後に神様がすべての良いものを与えて下さる神様であることを、少年は認めたのでした。

物質的なこの時代に人はよく「私が会社に行くから、私が働くから、私と家族を支えているんだ。」と言います。確かに、それはとても貴い事です。しかし、仕事を第1、神を第2と考えているならば間違っています。シナイ山の神様は、この時代に向かっても「私を第1に、事業を第2にしなさい。」と語っておられます。

私たちは主によって生かされています。神様が「生きよ！」と言って与えて下さる、神のことば（いのちのパン）「主の律法」を、しっかりと受け止めましょう。みことば、律法から学びましょう。